

お月様

東京女子高等師範學校

堀

七

藏

一、お月様

秋の空を飾るものは何といつてもお月様であります。一年中殆ど空に注意することのない人でも秋の月には感慨無量といふ形でありませう、月は年々歳々出で春の月も冬の月も亦秋の月も變つた所がないと眺める人もありませう。しかし仲秋の明月は詩人でなくとも、亦歌人でなくとも、何が一旬なかるべからずといふ氣持に丈けなるに相違ありませんまい。

二、秋の月

古來、月々に月見ぬ月はなければども月見る月はこの月の月といふ位、秋の月は愛でられてゐるのは一體何故であり

ませうか。秋の氣候が暑からず寒からず、月を眺むるに誠に都合がよいことが有力な理由であります。更に秋の空は漸く澄み渡り所謂明月を眺むる便宜のあることが亦一理由であります。空氣中に塵埃や濕氣が多いときは月の光がさええない。元來月は太陽その他の恒星のやうに自ら發光するものではありません。太陽からの光を反射するので、吾々が地球上で見ると月面が光つて見えるのであります。若し吾々が地球から月に旅行し、月から地球を眺めたときには地球も月のやうに見えませう。尤も満月の光力は太陽の光力に比べると、その六十萬分の一で、到底お話にならない位に弱いが、一等星の光力に比べると九萬位も強いのであります。兎に角月は太陽から受ける光の六分の一を、我が地球に反射するので光つて見えることに注意して下さい

い。

三、新月に三日月

月のない時があると考へる人がありませう。また三日月は月の一月に二回あるやうに思つてゐる方がありませう。しかし月の盈虚に注意すると是等の誤解は直にならなす。月は楕圓の軌道を描いて、わが地球の周圍を運行しながら、地球と共に太陽の周圍を運行してゐます。それで月の日光に照らされた面が正に、地球の夜の側の正面にあるときに満月であります。日光に照らされない暗い半面が、地球の晝の側の正面にあるときは新月であります。丁度電燈に照らされた顔を真正面から見るときが満月に相當し、電燈が後頭を照してゐるとき顔面を見るのが新月に相當するのであります。満月は望月とも稱し、新月を朔月といふことは御承知であります。

新月のときには月は太陽と略同時に東天から出て、又同時に西天に入るものであることは御承知でありますか。旭の東天に昇る勢はよく知つて居り、夕陽西山に没する光景

はよく眺めるが、これと殆ど同じ有様で月が出て月が入るとは、實に嘘のやうな眞であります。新月のときは日中月が出てゐる譯であります。しかし新月から三日後までは月は見えないのでありますが所謂三日月になると、日没後暫の間西天に鎌形、所謂三日月形をなして現はれるのであります。この三日月を一寸圖に表はして御覽なさい。

四、上弦の月と満月

三日月はその後一日く幅が増します。またその入りはだんく後れて來ます。新月後七日になると、即ち所謂七日の月は午後六時頃南の天に半圓の形をなして輝くのであります。これが上弦の月で、凸面が右方にあつて凹面が左方にあつた三日月が半圓となり、左方の明暗の界が殆ど直線になつてゐます。これは太陽に照らされた月の半面と照らされない半面とを等分に吾々が眺めるときで、上弦の月は夜半西天に入るのであります。更に月は次第に盈ち十日の月十一日の月となり、上弦の月より凡そ七日、新月より凡十四日で、月は完圓となります。これが所謂満月で

あります。藤原道長が、

この世をばわが世とぞ思ふ

望月のかけたたることもなしと思へば

といった、満月であります。満月は日没の時、東天に出で日出の時、西天に入るので、丁度太陽と交代する。而して終夜われくを照らすのであります。

五、下弦の月

満月から後は毎日月の出が後れて、十六夜の月も更に十八日の月もだんくおそく東天に現はれ。日出の頃には残月として尙西天に輝いてゐます。光る面の右方が次第にかけて来るが、廿一日の月になると再び半圓となるものであります。尤もこの時は直線の光界は右方にあつて所謂下弦の月となる。下弦の月は丁度夜半東天に現はれ、朝六時頃天中するといつて、天の眞南に昇つてゐるのでありますからその後は日光の威大に征服せられ吾人には影も形も見えないのであります。

下弦から後は半圓は次第にかけて狭くなり、廿四日頃の

お 月 様

月となれば再び三日月形となり、朝方東天にかゝるといふ有様であります。それで朝早く見る東天の三日月は眞の三日月ではない。眞の三日月は夕方西天に見るものでありますから、兩者の區別は判然してゐます。それに東天に見ゆる三日月は眞の三日月と形は似てゐますが、光る部分は反對であります。注意して御覽なさい。

更に月はかけて満月後凡そ十四日で新月となり、全く見えなくなりません。月がその軌道を一周するには二十七日七時四十三分十一秒であるが、新月から新月、又は満月から満月までは二十九日十二時四十四分三秒であります。これは月が地球と共に太陽の周圍を廻轉してゐる爲に、地球上の吾人にに月が地球の周圍を一周しても實際一周したことに見え、更に一周といくらか餘分に進まねばならぬからであります。

六、兎の餅搗

満月のときお月様を見ると兎がお餅をついてゐるやうに見えるといふので、古來玉兎と月を稱し、金鳥に對照した

ものであります。西洋では薪を背負つてゐる人といつてゐますが、月面を望遠鏡で見ると明るい所は凹凸のある所で暗い所は平らな所であります。その明るい所には山があつてその影までよく見えるのであります。月の山は地球のものとは大に異り、一種異様であると申します。平地も風変わりであるらしいが、注意すると是等の形状は多少變化する想であります。兎の餅搗の姿勢が段々變化してゐる譯であります。これは長年月に亘つて觀察せねばよく分りませんが、勿論吾々に向つてゐる月の半面には空氣もなければ、水もなく隨つて生物が居る道理がない。兎が餅をつく譯でもなく、薪を背負ふ人がゐる筈もありません。

あまつゆに汚れて涼し瓜の泥

はせな

たとへばなし

お月様は器量自慢で、誰にでも遇ふ度に、

「お日さん程可哀さうな者はない、年が年中汗水たらして働いて居ても、人が見かへりもしやしない。それに引きかへ、私は時々しか顔を出さないのであれども、顔を出す度に下界の人は夢中になつて、綺麗で美しいと云つて騒ぎます」と吹聴しました。其の吹聴が餘り度過ぎるので、人間と星とを除いて其の外の天地萬物は皆んな太陽に加勢する様になつて仕舞ひました。

それだから御覽なさい。太陽が出ると空が第一に綺麗な綺麗な色になります。山には美しい霞がかゝつたり、雪の頂が火の様な色に輝いたり、森の中は影や日向で縋を織り、野は見渡す限り活々となります、そうして太陽が沈む時には、草も木も鳥も獸も、別れを惜んで皆んな黒い喪服を身に纏ひます。

月が出て月に加勢するには、かすかな光の星と、あちこちでかすかに唾を開く水とがある計りです。成る程、人もほめます。

然し太陽は人がほめるほめない位は平氣で居るんですと

ら。

——有島全集より——